

---

## 川瀬著『瑞典式体操』と原典との相違

— 削除された体操図の検討を中心として —

頼住 一昭

愛知教育大学

The difference between translated edition by Kawase and original 'Swedish Gymnastics'

— Focusing on the examination of the figures deleted in the translated edition. —

Kazuaki YORIZUMI

Aichi University of Education

---

### Abstract

The aim of this paper is to consider the introduction of Swedish Gymnastics to Japan by the comparison of Kawase's "Suweden shiki Taiso"(1902) and its original edition, Nils Posse, "The Special Kinesiology of Educational Gymnastics"(1894) focusing on the illustrations deleted in Kawase's translation. There existed two branches in Swedish Gymnastics since Ling's death: the one is 'The Lingianism' stressing on the original form of Ling's Gymnastics and the other emphasises 'The Natural Method'. As Posse's Book depends on "Gymnastiska Ställningar och Rörelseformer" (1893) classified in 'The Lingianism', Kawase's Book took the role to introduce 'The Lingianism' to Japan. Being lack of fund, it is difficult to set up new teaching materials needful to Swedish Gymnastics in Japan at that time. Therefore Kawase deleted some illustrations concerning new materials adopted in the original edition. For the above reasons Swedish Gymnastics introduced to pre-war Japan omitted its various aspects, and hence, it was one-sided.

### はじめに

わが国におけるスウェーデン体操の具体的な紹介は、いうまでもなくボストンの体操学校などで学んだ川瀬元九郎(1871-1945)と井口あくり(1870-1931)によってなされたことはこれまでの先行研究の指摘するところである。

1902年にわが国にはじめて紹介されたこのスウェーデン体操は、1913年1月28日の文部省訓令第1号の制定により学校体育における統一的な指導指針が提示され<sup>1)</sup>、戦前のわが国における学校体育に中心的な役割を果たすことになる。当時、わが国に紹介されたスウェーデン体操は、その創始P.H.リング(Per Henrik Ling, 1776-1839)の死後、スウェーデン本国において発生したスウェーデン体操の二つの流れの一つであるHj.リング(Hjalmar Fredrik Ling, 1820-1886)やL.M.テルングレン(Lars Mauritz Törngren, 1839-1912)らを中心として発展した厳格な形式を重んずる「リング主義」(The Lingianism)を主たるものと

して紹介・導入されたものであった<sup>2), 3)</sup>。

そこで本稿では、わが国にはじめて具体的に紹介されたスウェーデン体操の実態をより明らかにするために、川瀬が1902年に著わした『瑞典式体操』<sup>4)</sup>に注目し、川瀬がその著書を著わすための原典として用いたN.ポッセ(Nils Posse, 1862-1895)の『THE SPECIAL KINESIOLOGY OF EDUCATIONAL GYMNASTICS(以下「SPECIAL KINESIOLOGY」)と略す』<sup>5)</sup>と川瀬の著書を比較対照し、両者に著わされている体操図を検討し、わが国における当時のスウェーデン体操の特徴について考察することを本研究の目的とした。

### 本論

(1) 川瀬元九郎によるスウェーデン体操の紹介  
1892年初夏、川瀬は医学を学ぶためにアメリカに渡り、ボストン大学医学部で医療体操としてのスウェーデン体操の効果など著書を通して紹介を受けた。川瀬が滞在していたボストンはアメリカ

でも特に体操の盛んな場所であり、特にボストンの各小学校が1890年6月以降、スウェーデン式体操を採用することになってからはスウェーデン方式が一步先んずるという状態で、当然川瀬も直接それらを経験したと想像される<sup>6)</sup>。

1899年の秋に帰国した川瀬は、12月には日本での医師活動を始めることになる。そして1900年5月、日本体育会体操練習所が体操学校と改称し10月から川瀬は生理衛生を担当し、それと同時にスウェーデン体操、体育学、体育原理なども教授することとなった。その後、1907年3月に日本体育会は「医療体操部」を体操学校内に設置し初代部長に川瀬が就任した<sup>7)</sup>。

川瀬によるスウェーデン体操の最初の紹介は、『教育実験界』<sup>8)</sup>において1901年12月10日発行の第8巻第11号を初めとし、その後第9巻第2号、第9巻第4号と連載され、特に第9巻第4号ではスウェーデン体操の内容を具体的に紹介している<sup>9)</sup>。また、N.ポッセのスウェーデン式体操を1901年頃から新聞雑誌に紹介し<sup>10)</sup>、1902年3月に『瑞典式教育的体操法』<sup>11)</sup>と同年の8月には『瑞典式体操』の二冊を著わし積極的にスウェーデン体操の紹介に努めた。

木村吉次氏らの研究でも明らかなように川瀬が主任で編纂した『瑞典式教育的体操法』は、H.ニッセン(Hartvig Nissen, 1855-1924)の『ABC OF THE SWEDISH SYSTEM OF EDUCATIONAL GYMNAS-TICS』<sup>12)</sup>をその主な拠り所にしたといえる<sup>13)</sup>。また、二冊目の『瑞典式体操』を著わすにあたっては、川瀬が同著を著わすにあたって凡例の冒頭で「本書ハ主トシテボスセ男爵ノ著述セラレタル『スペシャル、キネシヨロジー』ヲ譯述シタルモノナリ」<sup>14)</sup>と述べているように同著は、N.ポッセの『SPECIAL KINESIOLOGY』から多くの体操図を引用している。

このように彼は、帰国後積極的にスウェーデン体操の紹介に努め、わが国においてはじめてスウェーデン体操を具体的に紹介したのである。彼の考えの中心となったものは、従来の学校体育で行われていた「普通体操」の欠陥を記憶体操と結論

し、音楽や号令で、一連の体操を間違いなく行うために種目や連続を記憶させる体操を形式主義と批判し、一つ一つの運動を言葉で示しながら、演習の基本順序に基づいて行うということであった<sup>15)</sup>。

(2) スウェーデン本国におけるスウェーデン体操の二つの流れ

P.H.リングが1839年に王立中央体操研究所(Kungliga Gymnastiska Centralinstitutet以下「G.C.I.」と略す)の校長を退き、彼の後任を引き継いだのがP.H.リングの教え子であり、G.C.I.において特に医療体操の面に力点を置いていたL.G.ブランティング(Lars Gabriel Branting, 1799-1881)であった<sup>16)</sup>。このような彼が、三代目校長G.ニユブレウス(Gustaf Nyblaeus, 1816-1902)に引き継ぐまで23年間校長職に在職したことにより、結果として他の分野に対し力が注がれなかったということや<sup>17)</sup>、在職中の1842年の初等民衆教育令によってスウェーデン体操に対する要求が拡大したものの、そのリーダーシップを取るに至らなかったことなどが原因となり、その後のG.C.I.内部の後継者による衝突を引き起こしたと思われる<sup>18)</sup>。また、この点については、P.H.リングの死後、彼の生徒であるP.J.リードベック(Liedbeck, P.J.)とC.A.ゲオルギー(Georgii, C.A.)が出版した遺稿『体育の一般的基礎』(GYMNASTIKENS ALLMÄNNA GRUNDER, 1840)の内容が示すように、P.H.リングは自分の体育については具体的なものを十分明らかにしておらず、体育の原理についてはほぼ全体を示しているが、教材や施設、用具や指導法や指導者、その他の諸問題に関しては未完のままであったことなども衝突の原因と考えられている<sup>19), 20)</sup>。

P.H.リング以後、以上のような経緯で発展したスウェーデン体操は、Hj.リングやL.M.テルングレンらを中心として発展した厳格な形式を主張し保守性を高めた「リング主義」(The Lingianism)と、G.ニユブレウスやV.G.バルク(Viktor Gustaf Balck, 1844-1928)らを中心として発展した体操

に規定をあまり加えることなく動きの自然な方法に重点を置いた「自然的方法」(The Natural method)という体操の二つの考えが登場することとなった。

スウェーデンの体育・スポーツ史研究の第一人者であるJ.リンドロツ氏(Jan Lindroth)はこれら二つの体操の特徴を以下のように著わしている。

「リング主義」の特徴として。

- ・個々の動きの明確な効果は分析され細かく決定されなくてはならない。
- ・あいまいな効果を持っている動き、あるいは明確に生理的目的を示さないものは望ましくない。
- ・すべての身体教育は非常に器用に、そして調和に基づいたものでなければならない。それは、体のすべての部分がよく修練されているということと同じである。
- ・コントロールされていない、また、孤立しあらかじめ定めることのできない運動の修練は生理学的な観点から無用である。
- ・楽しむことの要素は特に重要ではない。  
などを著わしている<sup>21)</sup>。

また、「自然的方法」と呼ばれるものの体操の特徴として氏は、G.ニュブレウスの考えの基礎的なものを次のようにまとめ「自然的方法」の特徴を著わしている。「システムや方法を念入りに仕上げたというよりは、態度というべきものであり、そして彼の考え方の一部には多くの体操を制限しないということがある。G.ニュブレウスの考えの必須の要素は、いわゆる動きの自然な方法、主に

歩、走、跳躍である。また彼は、なによりもランニングを要素とした修練を好んだ。彼の基準の一つは古代ギリシャの五種競技の形態である<sup>22)</sup>と著わしている。

以上がいわゆる1870年代以降にはじまるスウェーデン本国でのスウェーデン体操の二つの流れであり<sup>23)</sup>、それ以後スウェーデン本国においては以上二つの主張がぶつかりながら発展することになる。

(3) 『瑞典式体操』とその原典『THE SPECIAL KINESIOLOGY OF EDUCATIONAL GYMNASTICS』との比較・検討

1902年に川瀬により著わされた『瑞典式体操』は、先にも述べた通りN.ポッセの『SPECIAL KINESIOLOGY』を訳述したものである。したがって、『瑞典式体操』に著わされている合計144図のスウェーデン体操および用具に関する体操図のうち、136図が『SPECIAL KINESIOLOGY』から採用されている。ちなみに『SPECIAL KINESIOLOGY』には合計267図の体操図の紹介がある。以上のことから川瀬は『瑞典式体操』を著わすにあたりN.ポッセの『SPECIAL KINESIOLOGY』から多くの体操図を引用し作成していることがわかる。<sup>24)</sup> また、この『SPECIAL KINESIOLOGY』は、1893年に著わされた『GYMNASTISKA STÄLLNINGAR OCH RÖRELSEFORMER』<sup>25)</sup>を主な拠り所にしており「リング主義」的な内容を主体としているものである<sup>26)</sup>。したがって、川瀬が訳述した『瑞典式体操』の内容も厳格な形式を重んずる「リング主義」的な動

表1-① 川瀬が『SPECIAL KINESIOLOGY』から採用しなかった図(『SPECIAL KINESIOLOGY』に明記されている番号で記入)

10	12	13	14	17	18	19	26	27	29	30	31	32	33	35	37	38	40
43	44	45	47	51	54	56	60	61	63	64	65	66	68	70	71	72	73
74	75	76	77	83	92	94	97	99	105	108	115	117	118	119	121	122	123
124	125	126	127	128	129	130	131	132	134	135	136	138	139	140	141	142	143
144	149	150	152	153	155	157	158	159	160	161	162	164	165	169	171	175	176
177	179	180	181	182	183	185	186	189	190	192	195	198	209	210	211	213	216
217	232	233	240	243	246	249	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261
262	263	264	266	267													

きを主体として構成されていることがわかる。しかし川瀬は、N.ポッセの『SPECIAL KINESIOLOGY』を訳述したとは言うものの合計131 図は採用せずに落としていることも明らかになった。これらを表わしたものが表 1-①である。

わが国に紹介されたスウェーデン体操の実態をより明らかにしていくためには、この川瀬が『SPECIAL KINESIOLOGY』から採用しなかった体操にも注目すべきであると考え、川瀬が落としたこれらの体操を検討してみた。その結果、①「器械・器具」を使用するものや、②「複数」（補助者を必要とするもの、以下「複数」と略す）で行う体操が数多く落とされていることが明らかになった。

①の「器械・器具」を使用した体操を数多く落としたことであるが（図 1-①）<sup>27)</sup>、このようなスウェーデン体操を行うためのこれらの「器械・器具」の設置は、当時としては経済的にかなり困難であったと思われる。時間的な隔たりがあり断定はできないものの、1913年に「学校体操教授要目」が公布され、その中心教材はスウェーデン体

図 1-①

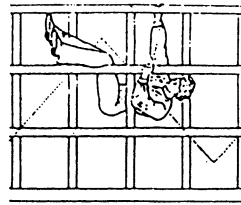


Fig. 121

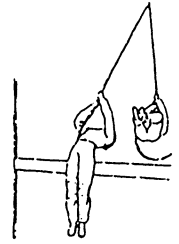


Fig. 240

図 1-②



Fig. 94a



Fig. 94b



Fig. 216

図 1-③



Fig. 260E



Fig. 260G

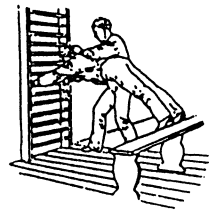


Fig. 261

図 1-④

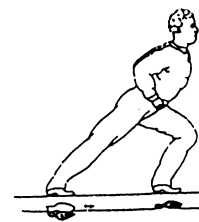


Fig. 29



Fig. 30

表 1-②

器械・器具	小学校	中・高・師範学校
鈴	○	○
竿	○	○
繩	○	○
縄	○	○
定	○	○
動	○	○
平	○	○
梯	○	○
梯	○	○
越	○	○
均	○	○
行	○	○
繩	○	○
跳	○	○
梯	○	○
平	○	○
並	○	○
鉄	○	○
吊	○	○
木	○	○
棚	○	○
下	○	○
木	○	○
立	○	○
跳	○	○
助	○	○
直	○	○
漆	○	○
樹	○	○
懸	○	○
行	○	○
棒	○	○
台	○	○
並	○	○
木	○	○

○印：備えるべき体操器械・器具  
 大能施の器に「学校設置」から  
 実施の「ため」に「小学校」の  
 ために「設置」されたから

Fig. 121, 240, 94, 216, 260, 261, 29, 30.  
 : Posse, N.: THE SPECIAL KINESIOLOGY  
 OF EDUCATIONAL GYMNASTICS.

操となった<sup>20)</sup>。そのため学校体育の主要な課題は、このスウェーデン体操をいかに実施するかということであり、そこで必要とされたことは、まず「授業ですぐに使える教程の作成と教員に対する講習であり、次いで、授業を物理的に保証するための体操器械の設置であった<sup>20)</sup>」といわれている。このように、従来の体操器械・器具に加えてスウェーデン体操の器械が採用されることになり、各学校において備えるべき体操の「器械・器具」が体操遊戯調査委員会から示された。設置すべき器械・器具は、表1-②の通りである<sup>20)</sup>。

また、「学校体操教授要目」の立案とスウェーデン体操の確立者といわれる永井道明(1868-1950)は、『学校体操要義』<sup>30)</sup>の中で各学校において設置すべき体操器械を著わしており、永井は体操器械を提示する際にその必要度に差をつけているが、これには性差や年齢差に応じた運動という観点だけではなく、設置費も大きく考慮して著わしていた<sup>31)</sup>。このことを象徴しているのがスウェーデン体操の代表的な器械である肋木の位置付けであった。永井は、肋木を小学校において必ず設置すべき器械とはしなかったのである。この事情について、後日次のように述べられている。「…(省略) 詰り我国の貧乏なること、我が村落の貧弱なること、我が市町村教育費の頗る多額に上って居ることの実際の事情を案じた時には、此の肋木を如何なる村落、如何なる学校に於ても、教授用に足りる程、十分に造った方がよいと奨導することは、余の正直なる頭から、どうしても出て来なかったからだ」と述べている<sup>32)</sup>。

以上のことから、20世紀初頭のわが国の時代的状况等を考慮すると、スウェーデン体操を普及させるために各学校に一斉に新しい施設を用意することは当時、経済的に困難であり、特にスウェーデン体操の代表的な器械である肋木の設置などは難しかったと思われる。その結果、川瀬は「器械・器具」を使用した体操のいくつかはこれらの理由により採用しなかったと考えられる。しかし、著書の中にはいくつかの肋木を使用した体操が著わされているが、これらの体操は肋木を使用しな

くても他の器械たとえば鉄棒などで代用が可能なものが著わされたと考えられる。

また、同時に川瀬が同年に著わした『瑞典式教育的体操法』に注目してみると同著には合計67図が示されており、その内「器械・器具」を用いた体操は一つも例示されていない。なぜならば同著の例言において「…本會の實驗に基き、本邦の小學校、中學校、女學校、師範學校の生徒に適當なる瑞典式徒手体操を撰擇し、以て其教授に當る者の便に供せんが爲に編纂せるものなり」と述べられている<sup>33)</sup>。つまり、この著書に著わされている内容は各学校においてスウェーデン体操を紹介するための「教科書」的な意味合いが強く、また同著の第一章・総論(四)において「教育的體操は、精神及び身体を教育するの目的を以て、教師の命令の下に多人数同時に行ふものなりとす。本書は、則ち此種の體操法を簡單に説述したるものなり」<sup>34)</sup>と述べられている。このように、教師の命令の下に多人数が同時に行うことを目的としているため、体操実施にあたっては新しい器械・器具を各学校に一斉に、しかも多人数の生徒に対し十分実施可能な程の肋木を購入することは当時としては経済的に難しかったと考えられる。したがって、すでに示した見解と重複するが当時の経済的側面を考慮した結果「器械・器具」を使用した体操は『瑞典式教育的体操法』においては一つも採用されなかったと考えられる。

次に、②の「複数」で行う体操を数多く落としたことについてであるが、これらをまとめたものが図1-②<sup>35)</sup>である。スウェーデン体操の教授上の特徴として川瀬は、これまでの普通体操のように演習の順序を「記憶」させ、あるいは教師の動作を「見習」ことで運動を行わせるという方式でなく、兵式体操の場合と同様に「号令」で動作させる仕組みにしてある」と述べ、それは、何よりも生徒の注意を自己の身体の運動そのものに集中させようとしたことによるものであった。この点で井口もまた「一々教師から命令を下して始めてそこに精神を籠めるので教師も生徒も一寸の間のあることを許さぬ」のがスウェーデン式体操だ

として、生徒の精神の集中、緊張をもとめている<sup>36)</sup>。また、時代的に若干のずれはあるものの、永井が海外体育事情調査のためにアメリカとスウェーデンに出発した1905年当時のわが国は、国民全体を国家至上主義に一本化しきれない状態であり、このような中で戦後政権が交代し再び教育における富強主義が叫ばれた時代であった<sup>37)</sup>。そのため、スウェーデン本国で行われていたいわゆる陸海軍の将校達がその訓練に用いていたスウェーデン体操の実施は、当時としては最も適合していたと考えられる<sup>38)</sup>。そのため当時は、スウェーデン体操をいかに実施するかということで、まず授業ですぐに使える教程の作成と教員に対する講習が急がれていた。その結果、「複数」で行う体操は、一人で行う体操に比べて複雑で号令をかけて行うようなものではないと考えられまた、お互いの能力が高くないと補助もできないであろうと考えられた。したがって、スウェーデン体操を普及させるためにはあまり難しくなく、そして、あまり専門的な能力を必要としない体操、つまり「号令」を用いて「一人」で行う体操が当時の時代状況に適しており、その結果「複数」で行う体操はあまり採用されなかったと考えられる<sup>39)</sup>。また、指導する面から見ると、当時は体操教師を根本的、持続的、永久的には成養する機関がなく<sup>40)</sup>、その結果、指導者不足も大きく影響したと考えられる。しかし、現時点ではこれらを確認できる資料等を見出してはならず今後の課題である。

また、この「複数」で行う体操の中には教育体操であっても医療体操につながるようなものも含まれており、T.J.ハルテリウス (Truls Johan Hartelius, 1818-1896)の著書と比較しながら医療体操との類似性を見出してみた。T.J.ハルテリウスは、1852年にG.C.I.を卒業し、1852年から87年まで当学校に在職した人物であり、その間の64年から87年にかけて彼は、医療体操部門の校長として活躍した人物である。また、彼は1874年から15年間にわたって Hj.リングやL.M.テルングレン、そしてV.G.バルクラと共に体操雑誌『Tidskrift

i gymnastik』を半年ごとに発行し、彼は編集責任者としてその努めにあたった<sup>41)</sup>。そのT.J.ハルテリウスが1894年に著した著書『GYMNASTIQUE SUÉDOISE』<sup>42)</sup>に著されている体操と川瀬が採用しなかった図の中の医療体操的要素を持つ体操とを比較してみると、描かれている人物や体操図の方向は違うものの、体操としてのポーズや補助者の補助の仕方が共通している図がある。これらの体操はいうまでもなく『SPECIAL KINESIOLOGY』に含まれているものである。しかし、これらの体操に対し川瀬は、『瑞典式体操』を著す際にはすべて落としている。これらの体操を示したのが図1-③<sup>43)</sup>である。これらの体操は、先にも述べたとおり指導する上でかなり難しい体操が含まれており、やはり川瀬は当時のわが国の状況にあった体操を紹介するためにこれらのお互いの能力が高くないとできないであろうと思われる体操は採用しなかったと考えられる。

また、こうした特徴の他に、川瀬が採用しなかった体操の中には一人だけで行うものも少なくない。しかし、これらの体操を考察すると、著書の中に一度採用されたものとかかなり似たものがあったりするものである。その結果、これらの体操は著書の作成上、体操図の数を限定するために採用しなかったものではないかと考えられる。これらをまとめたものが図1-④<sup>44)</sup>である。

まとめ。

N.ポッセが著わした『SPECIAL KINESIOLOGY』から川瀬の『瑞典式体操』に採用されなかった体操図を考察してみると彼は、わが国の当時の状況にあわせてスウェーデン体操を選択し紹介・導入したと考えられる。つまり、その紹介・導入に際しては、一定の意図が働いていたことを伺うことができる。

また、スウェーデン体操の二つの流れについて考察すると、川瀬が著書を著す際に「リング主義」とこれに対抗した、いわゆる「自然的方法」のどちらを意識的に強調したかは不明である。しかし『SPECIAL KINESIOLOGY』を訳述しているた

めに全体的にはやはり厳格な形式を重んずる「リング主義」的な内容をより多く示していることがわかる。

こうしたことから、川瀬とN.ポッセの両著を全体として比較した場合、川瀬は当時の体操実施のための設備費や各体操における難しさなどを考慮した結果、原典を訳述したとはいうものの、多くの体操を削除しており、その体操の種類などが一面的なものとなってしまったと考えられる。したがって、戦前のわが国に紹介されたスウェーデン体操は、形式的で画一的な体操であったことがあらためて確認できた。

引用文献および註.

- 1)成田十次郎編:スポーツと教育の歴史,p.60,不昧堂,1988.
- 2)スウェーデン本国におけるスウェーデン体操の二つの流れについては、Lindroth,J.,LINGIANISM AND THE NATURAL METHOD~THE PROBLEM OF CONTINUITY IN SWEDISH GYMNASTICS 1864-1891. 8th International Congress for History of Sport and Physical Education, p23-33, 1979.を参照.
- 3)野々宮徹:LINGIANISM AND THE NATURAL METHOD IN JAPAN, -ONE SIDED RECEPTION OF SWEDISH GYMNASTICS- Proceedings of the HISPA XI, p.335-336, 1985.
- 4)川瀬元九郎:瑞典式体操,岸野雄三監修,近代体育文献集成第I期(第10巻体操III),日本図書センター,1982.
- 5)Posse,N.:THE SPECIAL KINESIOLOGY OF EDUCATIONAL GYMNASTICS, Lee and Shepard Publishers, Boston, 1894.
- 6)大場一義:川瀬元九郎の生涯と功業,岸野雄三教授退官記念論集刊行会編,岸野雄三教授退官記念論集・体育史の探求,p.304,岸野雄三教授退官記念論集刊行会,1982.
- 7)大場一義:上掲書,p.301-303.
- 8)育成会発行所.
- 9)大場一義:前掲書,p.305.
- 10)竹之下休蔵・岸野雄三共著:近代日本学校体育史,p.62,日本図書センター,1983.
- 11)大日本体育會編:瑞典式教育的体操法,岸野雄三監修,近代体育文献集成第I期(第10巻体操III),日本図書センター,1982.
- 12)Nissen,H.:ABC OF THE SWEDISH SYSTEM OF EDUCATIONAL GYMNASTICS, Educational Publishing Company, United States of America, 1892.
- 13)木村吉次:川瀬元九郎とH.ニッセンの体操書,中京体育学論叢第13巻第1号,p.153-189,1971.
- 14)川瀬元九郎:前掲書,凡例 p.1.
- 15)竹之下・岸野共著:前掲書,p.63-64.
- 16)NORDISK FAMILJEBOKS SPORTLEXIKON (I), p. 1075-1076, Nordisk Familjeboks Förlags Aktiebolag, Stockholm, 1938.
- 17)Lindroth,J.:LINGIANISM AND THE NATURAL METHOD ~ THE PROBLEM OF CONTINUITY IN SWEDISH GYMNASTICS 1864-1891, 8th International Congress for History of Sport and Physical Education, p25, 1979.
- 18)野々宮徹:スウェーデンにおける外来スポーツ,中村敏雄編,スポーツの伝播・普及,p.52,創文企画,1993.
- 19)成田十次郎編:体育・スポーツの歴史,p.56,日本体育社,1978.
- 20)Lindroth,J.:op.cit.,24-25.
- 21)Lindroth,J.:op.cit.,26.
- 22)Lindroth,J.:op.cit.,27-28.
- 23)Lindroth,J.:op.cit.,31.
- 24)頼住一昭:スウェーデン体操のわが国への受容過程に関する一考察,体育史研究第9号,p.4-13,1992.
- 25)Kungl Gymnastiska Centralinstitutet, GYMNASTISKA STÄLLNINGAR OCH RÖRELSEFORMER, Kungl. Boktryckeriet, P.A. Norstedt & Söner, Stockholm, 1893.
- 26)頼住一昭:前掲書,p.5-10.
- 27)合計54図がある。しかし、ここでは紙面の都合によりその一部を紹介した。Posse,N.: op.

- cit., Fig.121-p.139, Fig.240=p.250.
- 28)成田十次郎:前掲書1), p.82.
- 29)大熊廣明:学校体操教授要目(1913)実施のために設置された小学校の体操器械について,日本体育学会体育史専門分科会・春の定例研究集会, p.2.1991.
- 30)永井道明:学校体操要義,大日本図書株式会社, 1913.
- 31)大熊廣明:前掲書, p.4.
- 32)大熊廣明:前掲書, p.5.
- 33)大日本体育會編:前掲書,例言p.1.
- 34)大日本体育會編:前掲書, p.2.
- 35)合計21図がある。しかし、ここでは紙面の都合によりその一部を紹介した。Posse, N.:op.cit., Fig. 94a/b=p.120, Fig.216=p.233
- 36)木村吉次:日本の近代学校体育に及ぼしたスウェーデン式体操の影響について,学校体育とスポーツ促進運動の歴史～国際体育・スポーツ史東京セミナー報告集, p.74, 1978.
- 37)竹之下・岸野共著:前掲書, p.69.
- 38)野々宮徹:前掲書3), P.335-336.
- 39)川瀬元九郎:前掲書,凡例p.2.において川瀬も「教授ハ可成簡單ナル号令ヲ用ヒ…」と記しており号令の必要性を述べている。
- 40)永井道明:体育講演集, p.61, 健康堂体育店, 1913.
- 41)NORDISK FAMILJEBOKS SPORTLEXIKON(W), p.721, FÖRLAGSAKTIEBOLAGET A. SOHLMAN & CO, Stockholm, 1949.
- 42)Hartelius, T.J : GYMNASIQUE SUÉDOISE, SOCIÉTÉ D'ÉDITIONS SCIENTIFIQUES, Paris, 1895.
- 43)合計6図がある。しかし、ここでは紙面の都合によりその一部を紹介した。Posse, N.:op.cit., Fig.260~~h~~/h=p.303, Fig.261=p.305
- 44)合計50図がある。しかし、ここでは紙面の都合によりその一部を紹介した。Posse, N.:op.cit., Fig.29-p.65, Fig.30-p.66.

(平成5年12月10日受付)